昭和46年2月1日発行（毎月1回1日発行）第20巻・第3号 昭和29年6月23日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号 昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー

WIDE COLOUR

ムスタング戦闘機 P-51D



☆特集☆

大はばに削減される在日米軍の各部隊

初めて公表される対潜哨戒機"東海"

RC35 15マルチ"ブリット"の作り方

'71 2



日本航空のジャンボ・ジェット

太平洋の空を行く日本航空のボーイング747。日航はいま3機を保有しており，発注中の13機を加えると全部で16機。写真の機体は1号機である。



エアバス競争のトップを切って初飛行したマクダネルダグラスDC-10。すでにアメリカン航空への1号機が引渡されており、今年の秋から路線に就航する。写真の機体は試作1号機。



オーストラリア空軍がF-111に代えて装備することになったF-4EファントムII。すでに24機全機が引渡されて部隊の編成訓練中。写真は領収飛行のときのもの。カンガルーのマークがあざやかである。

タイガー・シャークのファントム



機首にタイガー・シャークの口のマークを画いたF-4E ファントムII。ベトナムに駐留している第 366 戦術戦闘連隊の装備機。





Tu-22爆撃機の編隊飛行

3機編隊で訓練中のツポレフTu-22（ブラインダー）爆撃機。Tu-16（バッジャー）の後を継いで，いまではソ連の中距離爆撃機の主力機。



スホーイのSTOL戦闘機

リフト・ジェットを装備して離陸性能を向上させたスホーイのSTOL戦闘機（フラゴンB）。離陸のときのスナップで，胴体背面の二つの空気取入れ口扉が開かれている。



アエロフロートのアントノフ14プチョルカ（上）とアントノフ12（カブ）。赤系とブルーの対称的な塗装が面白い。





ニュージランド空軍のコルセア

ニュージランド空軍が大戦中に装備していたFG-1Dコルセア戦闘機。同空軍は60機のFG-1Dを装備したが，これは現存している1機で，塗装も就役当時のまま。

MITSUBISHI *J2M3 "RAIDEN"*

Revell

① PLAIN FIGURE OF ④ AIRCRAFT.
② No.302 AIR CORPS. ATSUGI.
③ FLOWN BY LIEUT. AOKI. TAINAN.
④ No.352 AIR CORPS. OMURA.

① 図④の平面塗装
② 第302航空隊(厚木基地)所属機
③ 台南基地所属の青木中尉機
④ 第352航空隊(佐世保鎮守府直轄・大村基地)所属機


1

②



③



④



© K. Hashimoto

三菱 J2M3 雷電
MITSUBISHI J2M3 RAIDEN

傑作"零戦"に続いて三菱航空機が製作した防空戦闘機で，大戦末期には日本海軍のB-29迎撃のホープとして活躍，昭和18年末から実戦部隊へ配属されて，マリアナ海戦で初めて敵機と交戦したが，雷電の真価を発揮したのは，なんといっても厚木基地第302空の雷電戦闘機で，本土に来襲するB-29を迎撃して相当の威力を発揮した。

☆キット紹介☆

レベル最新製品の「雷電」21型1/32スケールのキットは，日本機は日本人の手で，ということで筆者画き下しの図面をもとにして，郡是産業で設計・製作発売された野心作である。主な特徴としては，機体表面を実感満点の精巧なリベットとして認められている。レベル1/32スピットファイア級に仕上げたことと，脚の完全可動，脚柱は実機と同ように伸縮可動するクッションをもち，タイヤもゴム・タイヤを採用。カウルフラップは開・閉状態を選択でき，主翼の弾倉ハッチを着脱式にして，内臓した20mm砲を見ることができる。その他，キャノピも可動するのはもちろんで，精巧をきわめたエンジンやコクピットを見ることができる。

付属アクセサリーは大型増槽1個，デカールは台南基地所属の電光マークで有名な青木中尉機のほか，種々の所属部隊マークにできるバリエーション・マークが付属しているほか，例によって大型カラー図もついている決定的なデラックス版である。

☆塗装について☆

総生産数470機で終った大戦末期の機体なので，マーキングのバリエーションは余りないが，代表例をカラー図で示してある。

3機とも，日本海軍機の標準塗装である機体上・側面日本海軍ダークグリーン⑮，下面は明灰白色㉟（日本海軍ライトグレー），主翼の前縁は細い味方識別塗装がオレンジイエロー③+④+㉚で入っている。スピナは図のように赤褐色㊶レッドブラウン+レッド③+ブラウン⑦や濃緑色，赤と白またはシルバーなどがある。　(K. Hashimoto)

雷電データ(J2M2 technical data)

乗員1名(crew 1)，諸元(dimensions)；全幅(span) 10.80m，全長(length)9.70m，全高(height)3.88m，全備重量(gross weight)3,440kg，発動機(power plant)：三菱 火星23型甲(Mitsubishi "Kasei" 23type Ko)(1,800HP)×1基，最大速度(max. speed) 611km/h，実用上昇限度(service ceiling)11,700m，航続距離(range)1,900km，武装(armament)20mm×4，爆弾(bomb)60×kg×2。

This is the 2nd "masterpiece" air-defense fighter of Mitsubishi manufacture after the well-known "O-type" fighter. During the latter part of WWII, this was the intercepter which was hoped to counter the B-29. Placed in operational use late in 1943, this aircraft saw combat in the Mariana Islands first. The interception of. B-29s by Atsugi-based RAIDENs belonging to the 302nd Air Force (Japanese) is historically famous.

KIT:

The model kit RAIDEN Type-21 in the Revell 1/32 series is of the type designed and produced by the Gunze Sangyo Company from a drawing made by the author (Hashimoto). It was solely designed and made by the Japanese. Elaborate riveting details remind model fans of the excellent finish of the SPITFIRE in the same Revell 1/32 series. All gears and gear struts are movable and the tires are made of rubber. The magazine hatch can be removed, revealing a 20-mm gun. Naturally, the canopy is movable and offsets the exquisite engine and cockpit details. A large fuel tank is included in the kit as an accessary. As for decals, the kit includs that of Lt. Aoki of Tainan Base (Formosa), who is known by his "zigzag lightning" mark, and various other designs by which you can make the insignia of various other units. A colored figure is also included in the kit, making this large size model all the more "delux".

PAINTING:

This aircraft dates from latter WWII, and there were only 470 aircraft produced. Therefore, there are comparatively few marking variations. Representative markings are shown in the color figure. All three RAIDENs are painted in the standard scheme of Japanese naval aircraft. The Japanese Navy dark green (Revell Color No. 15) on the top and sides of the fuselage; RC-35 light gray and white (Japanese Navy light gray) on the lower surfaces; and fine identification stripes of orange-yellow (made by mixing RC-3, RC-4 and RC-30) on the edges of the wings. The color of the propeller shown in the figure is a mixture of RC-41 red-brown, RC-3 red and RC-7 brown. In addition, there were also propellers of dark green, red and white, or silver.

雷電の塗装に必要なレベル・カラー	
①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑦ブラウン
⑧シルバー	⑬カッパー
⑮濃緑色(1)	㉘黒鉄色
㉜フラットベース	㉝黒つや消し
㉟明灰白色	㊶レッドブラウン



三菱局地戦闘機“雷電”21型(J2M3)　台南航空隊の雷電21型局地戦闘機。台南航空隊は艦上機の練習航空隊に指定されていたが，この雷電21型は練習慣熟用機として保有していたらしく，機体の塗装は当時の海軍機の標準塗装をしている。(1944年撮影)



雷電”

空博物館が保有している

局地戦闘機　ファンたちの手で美し

く　元され、塗装も　しく塗り上げている。

(1970年7月撮影)

① PLAIN FIGURE OF ③ AIRCRAFT
② Me262A-2a, I/KG51
③ Me262A-1, JG1
④ Me262A-2a/u1, EXPERIMENTAL COMMAND

① 図③の平面塗装
② Me262A-2a第51戦闘爆撃航空団I飛行隊所属機
③ Me262A-1第7戦闘航空団所属機
④ Me262A-2a/u1実験飛行隊所属機
マークは"エーデルワイス"（花の名前）



①

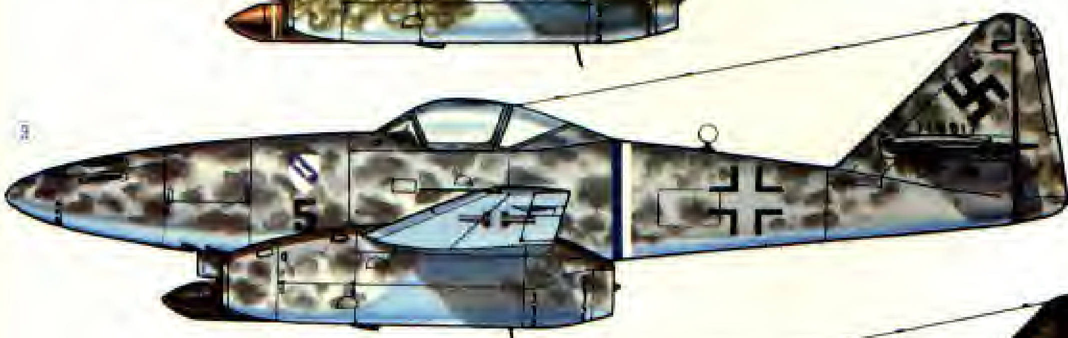




②



③



④



© K.Hashimoto

メッサーシュミットMe262シュワルベ
MESSERSCHMITT Me262A SCHWALBE

あまりにも有名な世界最初の実用ジェット戦闘機で、総生産数は約1,433機といわれているが，本格的な実戦には，あまり活躍しないうちに終戦を迎えてしまった。A，B，C，D，などの各型が作られ，その他種々の試作型もある。なお戦闘機型の名称はシュワルベ，爆撃機型はシュツルフォーゲルという。

☆キット紹介☆

レベルの1/72ファイターシリーズのうちで，最も大型キットに属するのがこのMe262Aのキットで，パーツ数はスタンド共で約38個あり，可動部は前脚と車輪だけであるが，シャープでガッチリとした仕上りを示す。実感もよく出ていて，よいキットのひとつであるといえる。

☆塗装について☆

図①と③　胴体とエンジン・ポッドの上面と側面はライトグレー（グレー75㊲をホワイトで薄める）の地色にグレー75㊲のインクスポット迷彩があり，下面はライトブルー⑳，翼の上面とエンジン・ポッドの背はダークグリーン⑰の塗装，胴体のストライプはブルーと白，国籍マークと文字は黒となっている。主翼上のマークは白フチだけで黒い十字はない。

図②　胴体とエンジン・ポッドの上・側面はRLMグレー（ダークグリーンのまざったグレー）の地色の上にダークグリーン⑰のメロメロ迷彩，機体下面はライトブルー⑳，翼の上面はブラックグリーン⑱とダークグリーン⑰の折線分割迷彩。機首と垂直尾翼の先端はホワイト①＋㉚。胴体の国籍マークと文字は白，主翼上面のマークは白フチだけの十字マークで，翼下面は黒の標準マークつきとなっている

図④　機体の上・側面はダークグリーン⑰とブラックグリーン⑱の不明確な折線分割迷彩，下面はライトブルー⑳。国籍マークは主翼上面が白フチだけの十字，下面は黒フチだけの十字となっている。

(K. Hashimoto)

Me262A　データ(Me262A technical data)

乗員1名(crew 1)，諸元(dimensions)：全幅(span) 12.48m，全長(length) 10.6m，全高(height) 3.84m，全備重量(gross weight) 6,400kg，発動機(power plant)：ユンカース・ユモ(Junkers Jumo) 004B-3 (出力900kg)×2基，最大速度(max. speed) 870km/h，実用上昇限度(service ceiling) 11,400m，航続距離(range) 1,050km，武装(armament) 30mm Mk 108×4，R4M-AAM×24，

The Messerschmitt Me262A was the first jet fighter in the world to be placed in operational use. It is reported that a total of 1,433 planes were produced in types A, B, C and D. It was introduced late in WWII and no remarkable operation was reported regarding this model. The fighter-type was called "Schwalbe" and the bomber-type "Schutz Forgel".

KIT:
The Me262A kit belongs to one of the largest kits in the Revell 1/72 fighter series. It has 38 parts, including a stand. The front gear and wheels are movable. Its sharp and dignified finish will remind model fans of the sharpness of the real aircraft.

PAINTING:
Fig. 1 and Fig. 3. The top and sides of the fuselage and the engine cover have an ink-spot camouflage of RC-37 (gray-75), upon a base of light gray, which is made by blending RC-37 (gray-75) with white. The lower surfaces are RC-20 light blue. The wing tops and engine cover are RC-17 dark green. Stripes on the fuselage are blue and white. The insignia and letters are black. Marks on the wings have white borders and no black cross.

Fig. 2. The top and sides of the fuselage and the engine cover have a roaring flame camouflage of RC-17 dark green over RLM gray (gray mixed with dark green). The lower surfaces of the fuselage are RC-20 light blue. The upper wing surfaces are camouflaged with RC-18 black-green and RC-17 dark green. The nose and tail top are RC-30 and RC-1 white. The insignia and letters on the fuselage are white. The cross markings on main wings are bordered in white. The markings on the lower surfaces of the wings are bordered in black.

Fig. 4. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-17 dark green and RC-18 black-green. The lower fuselage surface is RC-20 light blue. The insignia on the upper wing surfaces are bordered in white, while that on the lower surface is surrounded by in black.

Me262Aの塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑤ブルー
⑰ダークグリーン	⑱ブラックグリーン
⑳ライトブルー	㉓ダークグリーン
㉚フラットベース	㉝黒つや消し
㊲グレー75	



メッサーシュミットMe262Aシュワルベ　米国に持ち帰ったMe262A-1a/u3写真偵察型。塗装は1945年頃のもので、尾翼下のFE4012は米軍が記入したもの。この機体は現在オンタリオ航空博物館に展示されている。（1945年9月30日撮影）



メッサーシュミットMe262シュワルベ

米国ウイローグローブ海軍基地に展示されている。Me262Aシュワルベで，ドイツより持ち帰った頃は，真黒な塗装であったが，現在はこのような迷彩塗装となっている。
（1968年5月撮影）



すべり出し快調 XC-1

航空自衛隊の次期輸送機ＸＣ-1は，すでに試作１，２号機が完成，先月号で既報のように１号機は去る11月12日に初飛行を終えており，２号機もまもなく離陸の予定，いまのところＸＣ-1の開発は順調に進められている。

ここの写真は去る11月28日，各務ケ原飛行場で行なわれた１号機の公開飛行でのスナップ。上は低速で飛行中の１号機，下は着陸で，主翼のスポイラーを上げて減速中。

THE FIRST JASDF XC-1, 001, IS UNDERGOING TEST FLIGHT AT THE MANUFACTURER'S BASE AT THE KAGAMIGAHARA.















左の段は、上が2機のT-3
をしたがえて高速(250ノッ
・約時速450km)で飛行中、
は、低速（100ノット・約18
km）で飛行中の1号機で、下
の3枚は着陸。
〔上〕はまもなく初飛行が
定されている試作2号機。
〔右〕は1号機の主翼。
でスダレのような4段フラ
プが下げられている。〔下〕
川崎重工岐阜工場ハンガー
に並んだ1号機（手前）と
号機。この両機はやがてす
おとなりの航空自衛隊実験
空隊に移され、今後2年間
用試験が行なわれる。1号
の初飛行後のテストでも、
速時に舵が利きすぎるとい
点があったのみで、大きな
ラブルはないという。




18-1002




18-1001



イギリス軍用機スナップ集

1968年7月に最初の機体の引渡しを受けて以来、イギリス空軍のファントム部隊は、着々と整備されつつあり、すでに第6、14、54の各飛行隊が戦闘爆撃・偵察型のＦ-4Ｍ（ＦＧＲ.2）を装備し、海軍の航空戦力縮少によって空軍に移行された迎撃型のＦ-4Ｋ（ＦＧ.1）の部隊も、いま3個飛行隊が編成されつつある。〔上〕“空中タンカー”ビクターから給油を受けるファントムＦＧＲ.2。昨年春、東南アジア方面で行なわれた演習に遠征途中のシーンで、このファントムは第54飛行隊の所属機。〔下〕370U・S・ガロン入りの増槽二つを吊して飛行中のファントムＦＧＲ.2。



〔下〕イギリス海岸沖での演習を偵察に現われたソ連のTu-54と編隊を組むファントムＦＧ.1。第43飛行隊の所属機。









このページ3枚は、イギリス空軍のホーカーシドレー・バルカンB.Mk2。

オリンパスMK201／301エンジンを装備した性能向上型のB MK2は、1960年の7月に英空軍の爆撃部隊に初めて装備されて以来、これまでに第9,12,27,35飛行隊など8つの飛行隊に装備されている。

かってはシンガポール、マレーシア方面の英空軍基地では、どこでもかならずこの迷彩の姿が見られた。上と下の写真で、胴体下に装備されたブルースチール空対地ミサイルが見える。



ホーカー・シドレー　バッカニア艦攻も、海軍の航空戦力縮少の影響を受けて，75～80機が空軍籍に移されて再就役することになった。イギリス空軍ではマーテル空対地ミサイルが装備可能な空軍の標準型をS．MK２B，かっての海軍型をS．MK２Aと呼ぶことになったが、A型もその大部分がB型に改造される。このほか空軍では1968年にS．MK２Bの新規生産分26機を発注しており、1972年までに6つのバッカニア飛行隊を編成する。





〔左ページ上〕バッカニアS.MK2A。主翼下にブルパップ空対地ミサイル2発とロケット弾ポッドを吊している。〔左ページ下〕空軍籍に移されたS.MK2Aの1機。ビクターから受油中。〔上〕ロケット弾を発射するS.MK2A。



〔上〕これも空軍に移されたS.MK2Aの1機で、B型への改造のために各種のテストが行なわれた機体。〔下〕海軍の塗装のままのS.MK2A。ダミーのマーテル・ミサイルを吊してテスト中。なおA型の一部は、そのままで訓練部隊O.C.Uに装備される。





〔上〕200人以上の兵員を運べるイギリス空軍の大型戦略輸送機ショートＳＣ.５／10ベルファースト。1966年１月以来、エア・サポート・コマンドの第53飛行隊が10機を装備している。



〔上・下〕ウエストランド　ウエセックスＨＣ.ＭＫ２ヘリコプタ。シコルスキＳ-58に英国製のノームＭＫ110/111ガスタービン・エンジンを付けたもので、空軍のトランスポート・コマンドの第18飛行隊に配置されている。



ソビエト軍用機スナップ集

PHOTO by TASS



〔上〕MIG-21PF全天候戦闘機（フィッシュベッドD）の編隊飛行。垂直尾翼付根のドラッグ・シュートがないPFの初期の型（ドラッグ・シュートを装備したのはフィッシュベッドFと呼ばれている）で、両翼下のパイロンには何もなく、訓練を終えて帰投途中のスナップでもあろうか。この機体を下から見た写真は珍しく、胴体下面中央部のふくらみなどがよくわかる。〔下〕離陸する超音速爆撃機ツポレフTu-22（ブラインダー）。











左ページ3枚は39ページ下と同じくTu-22爆撃機の離陸。とぎすましたような鋭い機首，外翼で50度という強い後退角を持つ垂れ下ったような主翼の両側が，エンジンを吹かしている図はぶきみである。このころ，同機の写真の公表が多く，中距離爆撃機の主力の座についているものと思われる。

（上）空中給油中のTu-16中距離爆撃機〈バッジャー〉。この種の写真は以前にも発表されたが，これは夜間飛行で給油中のもの。

（右・下）離陸するMiG-17戦闘機。MiG-17は，訓練部隊などでまだかなり使われているようである。右の機体は両翼に増槽を付けているが，下の機体はなし。







〔上・下〕全天候の双発戦闘機Yak-28P（ファイアバー）。タンデム複座の同機は、首都防衛部隊に配属されて活躍中。上の写真は去る11月中旬の撮影で、凍てついたエプロンで発進準備中のもの。下は10月上旬の撮影で、離陸滑走開始。



〔下〕東欧諸国との合同演習に繰り出されたミルMi-4（ハウンド）ヘリコプタ。ヘリから散開しつつあるのは東独陸軍の歩兵たち。10月16日、ワルシャワ近郊にて。







（上・右）対潜哨戒の任についているソ連海軍のベリエフBe-12（メイル）飛行艇、捜索ビームを突き出して飛行中。下の写真は艦船との共同作戦中のシーン。両者とも美しいスナップである。



フォト ニュース



〔上〕アメリカン航空に引渡されるDC-10の1号機がこのほど完成した。同航空では同機を25機（オプションとしてさらに25機
発注しており、今年の秋から路線に投入する予定。〔下〕こちらはロッキードのエアバスL-1011。11月17日初飛行当日のスナッ
で、モハビ砂漠上空を飛行中。同機も今年末までに各航空会社に納入される。



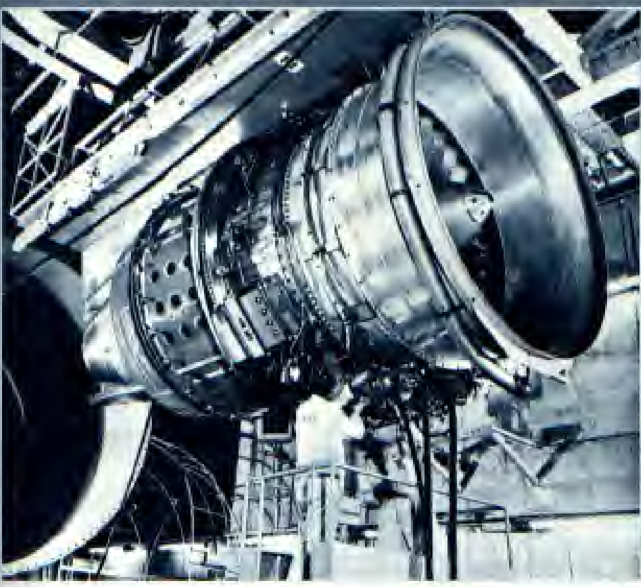
〔下〕アメリカのSSTボーイング2707の開発は着々と進められているが、これは最近完成した金属製工学用モックアップ。大
きさと構造が実物と同じに造られているので、工作はもちろん、艤装品の配置や整備性などを調べるのになくてはならないもの。写
真では機首を下げて離着陸姿勢を示す。しかしこのモックアップは右の翼がなく、材料もチタン合金ではなくアルミ合金製。





（上）宙返りからインメルマン・ターン、きりもみなどもできるレイムス/セスナ　モデルF150エアロバット　スポーツ機の1971年型。71年型では操縦装置が改良され、プロペラ位置もキャビンから離されて、居住性が工夫されている。（右）Mi-4ヘリコプタと装甲車による息の合ったソ連の偵察パトロール訓練の模様。11月中旬の撮影（TASS）。（下）ロッキードL-1011 トライスターに装備されるロールスロイスRB 211エンジンの量産型第1号が完成、このほど英国ダービーでテストを開始した。写真はテスト台上の同エンジン。





スナップ だより



【上・下】大阪空港に飛来したタイ国海軍のS-2Fトラッカー。上の機体はシリアル136477機で、胴体にタイ語、垂直尾翼の国旗のなかにジャンボ（象）が描かれている。下の機体は136416機。上は11月5日の撮影（大阪市・森正則）、下は11月17日の撮影。（川西市・海上亮平）。







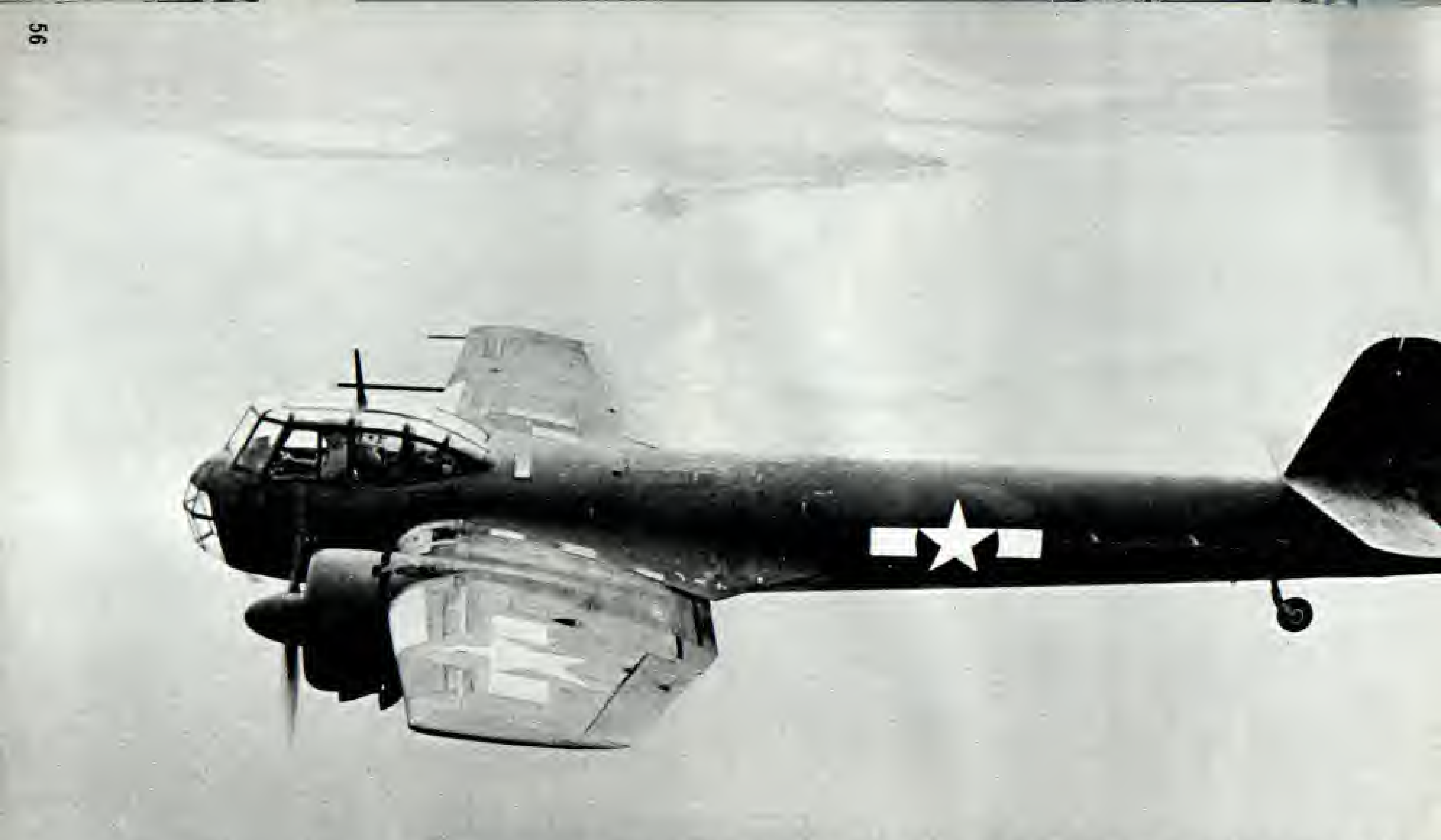
【上】初めて日本を訪れたイギリスの不定期航空会社ドナルドソン・インターナショナルのブリタニア300。11月5日、大阪国際空港にて。ロイド・インターナショナル航空のブリタニア307F、モナーク航空のブリタニア312など、最近大阪空港へのブリタニアの臨時便が多い（大阪市・森正則）。

【左】アメリカン・コカコーラボトラーズの社有機ガルフストリームII。11月29日、大阪国際空港にて（豊中市・山崎伸一郎）。

未発表 海軍機写真集 ②



ANTI-SUBMARINE PATROL-PLANE TOKAI (Q1W1)



A Japanese anti-submarine patrol plane makes its first test flight since the war's end to Tokyo for shipment to the United States. Called the "Tokai" (Q1W1) the plane was flown by a Japanese pilot and flight crew from Saitozaki, Kyushu, to Oppama, Kanagawa with a U. S. Navy Corsair flying as protective cover.





55ページから59ページまでは、終戦時に接収され、アメリカ本国に持ち去られた九州"東海"対潜哨戒機（Q1W1）。飛行中のスナップは終戦半月後の1945年9月1日、九州飛行機の専用飛行場であった西戸崎から追浜までの空輸途中のもので、米海軍のコルセア1機が護衛機として一緒に飛んでいる。この日、2機の"東海"が大阪の伊丹飛行場を中継地として西戸崎から横須賀に空輸され、まもなく船でアメリカへ運ばれている。空輸にあたったのは九州飛行機の河野新一（本文記事参照）、宮石義喬両パイロットで、"東海"は米軍に接収された日本の陸海軍機の最後の機体であったという。

地上のスナップは西戸崎飛行場で発進整備中のもの。米軍機の塗装にかえられ、胴体両側面と右主翼に電探用のアンテナが見える。右中の機体は、電探のアンテナを左主翼につけたほかの1機。(MARINE CORPS PHOTO)











珍らしいムスタング



変りだねTF-51D

ムスタングには、TF-51Dという練習機のバリエーションがあった。本機は、第2次大戦後にP-51D戦闘機をテムコ社が改造したもので、うしろに教官席を新設して大型の風防を取付け、戦闘爆撃機のパイロット訓練に用いられた。戦時中は別にTP-51Dという似た改造型があるが、尾輪を固定したり、艤装も違っている。

TF-51D（正式にはTF-51D-25-NT）は、造られた機数も多くなく、補助的に空軍で用いられたので、その存在はこれまでほとんど知られなかった。

このページ2枚と右ページ上2枚がそのTF-51Dで、戦闘機型の姉妹機とよく似て非常に精かんでスマートだが、風防が大きく、尾輪をぶら下げたままである。12.7mm機銃は全部外され、弾架も小型なもの1個と、武装はほとんどゼロに等しい。弾架には練習用爆弾が懸吊されている（下の写真）。風防は大きくなって背ビレいっぱいまでスライドする。そのためアンテナ支柱も姿を消した。胴体にはバズ・ナンバーが大きく画かれている。正面と後方から見るとP-51Dそっくり。







標的曳航機になったF-51D

下の機体はカリフォニア州空軍で標的曳航機として使ったF-51D。胴体右側から長い棒が突き出ているが、ここから長いワイヤが出て、その先に標的が取付けられていた。地上ではワイヤはウインチで胴体内に巻込まれている。





D型の最終型F-51D-30-NA



上の2枚はカリフォルニア州空軍が使用していたF-51D-30-NA。D型の最終型で、機銃6梃のほかロケット弾6発に増槽か中型爆弾を懸吊できる。"ANG"は州空軍（Air National Guard）の略号。下の機体は戦闘型のまま米軍が1947年以降も使用したP-51D。おそらく連絡用に使ったと思われるが、この状態のP-51は非常に珍しい。

戦闘型のまま定年を延ばしたD型



鹵獲された日本の軍用機《その11》



CAPTURED JAPANESE MILITARY AIRCRAFT DURING WW II



〔前ページ〕昭和19年6月18日、米海兵隊の猛攻の前に陥落したサイパン島アスリート飛行場で敵の手におちた零戦52型。第261航空隊の所属機。米軍ではこの飛行場から完全な状態の零戦52型を12機手に入れ、本国に持ち帰っているが、写真の機体はそのうちの2機で、船積みのため海浜に運ばれたところ。1944年6月28日の撮影。

〔上〕機体の中央部に直撃弾を受けた2式飛行艇。右手にもう1機の残骸が見える。同じくサイパン島のタナパグ港飛行場にて。1944年7月の撮影。

〔右〕これは硫黄島のスクラップ処理場に集められた日本機の残骸。1945年2月27日の撮影。









〔左ページ下〕サイパン島で捕えられた97式1号艦攻。この機体も完全な状態で、米本国への輸送のために整備中のもの。1944年6月の撮影。

〔上右〕上の写真の中央の2式飛行艇の機首を横から見たもの。左側のエンジン・ナセルは焼けこがれているが、右側はプロペラもほぼ完全。待機中もねらい射ちされたものと思われる。

〔右〕アスリート飛行場で被弾した2機の1式陸攻。胴体や尾翼に無数の弾痕が見える。後方の建物は日本軍が使っていた弾薬庫。1944年6月17日の撮影。

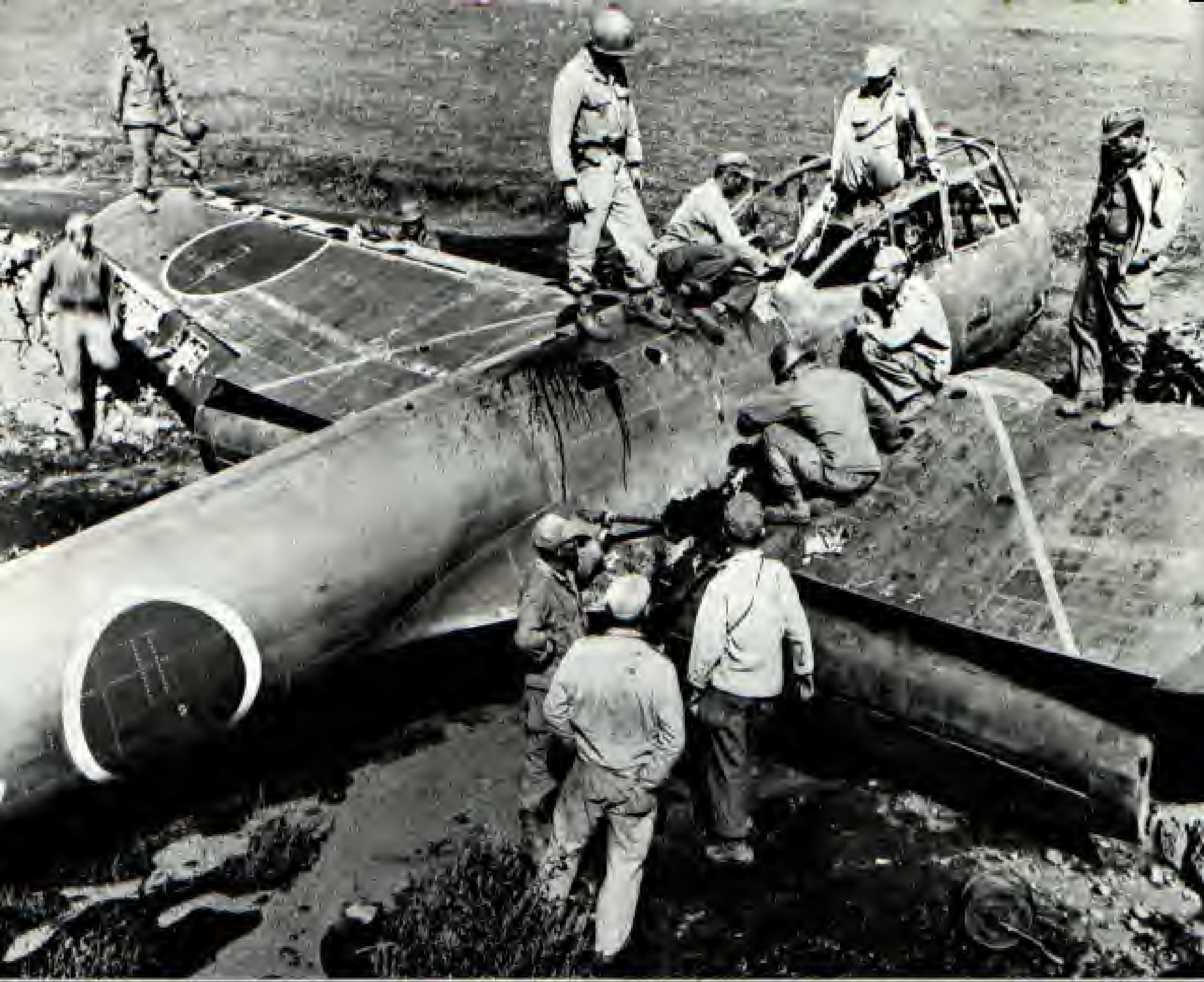
〔下〕カムフラージュ用ネットを被せて保管中の零戦52型。こうしておかないと、日本機の襲撃で損傷されるおそれがあった。アスリート飛行場の掩体にて。1944年6月10日。

〔最下段〕右の写真の後方に見える1式陸攻の1機。足場をかけて解体中。1944年6月19日の撮影。



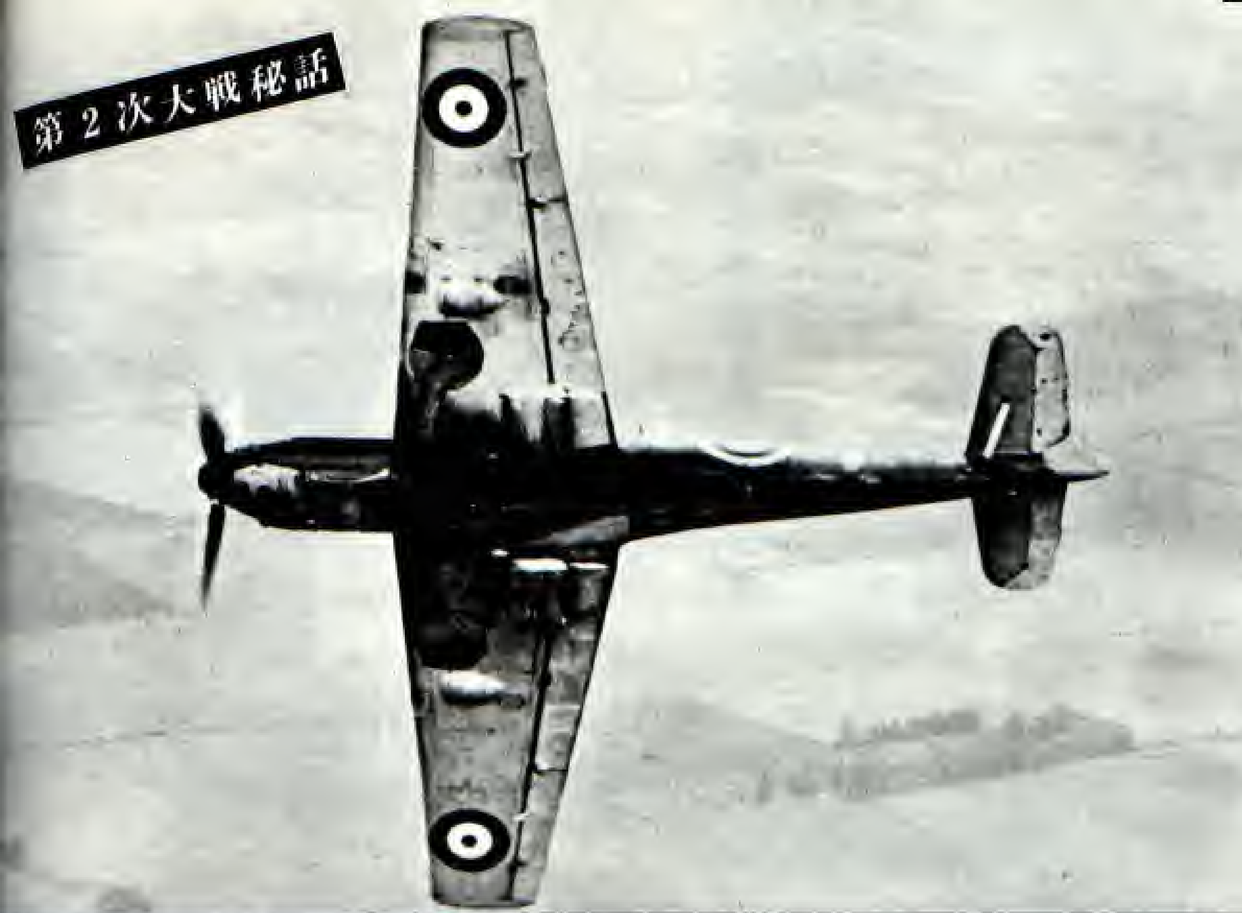






（上・下）済州島で捕えられた"東海"哨戒機。上の写真は破壊するために炸薬を仕かけているところ。胴体後部に、操縦席が編隊操縦の場合、おたがいに間隔距離の目印しにした"C"印が書かれており、この機体は磁探を装備したQ1W2と思われる。1945年4月10日の撮影。





イギリスのドイツ機専門部隊

“ラフワッフェ”

第2次大戦中のイギリスには“ラフワッフェ”と呼ばれる特別飛行小隊があった。“ラフ”とはイギリス空軍の頭文字RAFの略称、“ワッフェ”とはドイツ空軍ルフトワッフェのこと。ラフワッフェとはつまり、「イギリス空軍に所属するドイツ空軍」のこと。この“特別ドイツ空軍”の任務は、捕獲したドイツ機を整備して飛行させ、その性能を徹底的に究明することであった。これはその“装備機”の一部である。

〔上・下〕このメッサーシュミットBf109E-3は、緒戦にフランスで捕獲されたもので、“ラフワッフェ”で盛んに用いられた1機。スピットファイアやハリケーンと模擬空戦をやって、イギリスのパイロットたちが戦法を研究するのにも役立った。







〔トップ〕このBf109G・2は、英本土で不時着して、そのままRAFで使用されたもの。
〔中〕大戦末期に手に入ったBf109のG型。塗装はドイツ空軍のままで、マーク類だけ変っている。主翼下面に懸吊された機関砲と、胴体下面の増槽が目につく。





［このページ中］北アフリカで捕獲されたＢｆ109Ｆの１機。熱帯フイルターを付けた砂漠型で、塗装はドイツ空軍のままで、マークだけ塗り変えられている。

［下］"ラフワッフェ"の最初の保有機は、このハインケルＨｅ111 Ｈだった。1940年２月９日にスコットランド上空で撃墜されたのを修理したもので、ながいあいだ部隊で使われた。

塗装やマークは完全にＲＡＦの規準に合わせてあり、武装こそ付けていなかったが、大戦中のイギリス人で航空に関心のある人なら知らない者はないほど有名な存在だった。









〔上2枚〕"ラフワッフェ"の最初の保有機He111H。この機体は43年11月に離陸の間違いで、Ju88と正面衝突を避けようとして転ぶくしてしまったという。〔下〕メッサーシュミットＢｆ 108連絡機は3機がＲＡＦで用いられたが、これはその1機。これは敵機の資料を得るというよりむしろ連絡機として重用された。

